公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

設立30周年記念式典

鎮魂延年「黒い媼（おうな）」舞

舞・小笠原 匡氏
（能楽師和泉流狂言方／重要無形文化財総合指定保持者）

「延年」とは、寺院において大法会後の余興として僧侶や稚児が行った芸能の総称で、平安中期に起源をもつ。「黒い媼」舞は、2010年に島根県の名刹・清水寺で芸能の神でもある摩多羅神（またらしん）像が発見されたのを機に、2012年4月に民俗仮面研究家・乾武俊氏と能楽師和泉流狂言方・小笠原匡氏が考証創作したもの。関西・大阪21世紀協会設立30周年の式典にあたり、芸能精神の原点に立ち返り、地鎮・鎮魂の思いを込め披露された。

設立30周年を迎えて関西・大阪21世紀協会は、2013年2月18日、国立国際美術館（大阪市北区）において、「設立30周年記念式典と感謝の集い」を開催しました。協会の賛助会員をはじめ歴代理事、評議員、元協会スタッフなど、大阪の文化振興や都市魅力の向上にむけて共に活動してきた人たちが一堂に会し、設立以来変わらぬ志のもと、「文化立都」実現への思いを新たにしました。

文化を社会の活力として「民」が支える公共活動を推進

公益財団法人 関西・大阪 21 世紀協会
理事長　堀井 良殷

まず日頃のご支援に心からの感謝を申し上げます。

30年にわたり温かいご支援とご協力をいただき、「文化の灯は重要だ。しっかりやれ」というお励ましの言葉を多くの方々からいただいたからこそ、今日こうして活動を続けることができているのです。さらにこの30周年にあたり、多くの方々より激励をいただきました。重ねて御礼申し上げます。これまで苦労を共にしてきた職員やスタッフの皆さんにも御礼を申し上げます。

30年前、活力ある21世紀をめざして大阪21世紀協会を設立された先人の高い志と理念は、21世紀になってもいささかも色あせることなく、それどころか、ますますその理念の正しさと、いまだ道半ばであるがゆえにその重要さを増していると思います。

21世紀になって、長引く厳しい経済状況や行政の財政危機、あるいは相次ぐ自然災害などに見舞われましたが、そのなかで私たちは、改めて日本人の持つ精神的な強さを自覚することとなりました。物が壊れることがあっても心が壊れてはならない。自信と誇りと勇気を持って自立して行かなければならないということを学びました。

この10年、とくに私たちが微力ながらも力を入れて参りましたのは、関西・大阪の持つ文化の力を社会の活力に活かし、誇りを持って世界と向き合えるまちにしたいというただその一点を願ってのことでございました。私たちが推進して参りました「水の都大阪」を磨こうという運動も、皆様のご尽力のおかげで水辺の風景が一変し、21世紀の大阪の社会運動として歴史に残る成果を上げたと思っております。

大阪の地域としてのブランド、つまり、人に人格があるように都市にも都市格があると思います。そのブランドを磨き、品格ある都市として世界に発信して行く活動は、息長く倦まずたゆまず諦めず、長期にわたって続けなければならないと存じます。

いま日本の成長戦略のためイノベーションが求められていますが、文化こそが創造力の源泉であり、イノベーションの母ではないでしょうか。答えのない問題の解決には文化の力が必要です。情報の収集と分析のためには、幅広いそして深い文化的な素養が必要であります。だからこそ社会の文化的風土づくりが極めて重要だと考えます。

なにわ大阪には、日本の国づくりが始まって以来の伝統が幾重にも折り重なって集積しております。それらを今一度洗い直し、確認しつつ、新たな創造活動に結びつけなければならないと思います。そのためには人を育て応援することが鍵となります。次世代を担う方々には、歴史と伝統に学び、しっかりした世界観、大局観を備えた人材に育ってもらいたいと願っています。

とくに企業の方々には、これまでも貴いお志をいただき、物心両面のご支援をいただいて参りました。今後さらに幅広い市民にも参加いただき、企業、NPO、個人など、志のある方々の心と心を繋ぎ、市民が“志民”となり、「民」が支える公共的な活動がますます活発になりますよう推進して参りたいと考えております。どうか引き続きご支援、ご指導賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

（設立30周年記念式典「御礼のご挨拶」）

厳かに、華やかに
「文化立都」への思いを高揚

会場となった国立国際美術館には、400人を超える参列者が集い、記念式典は、住吉大社に伝わる「住吉踊」で幕を開けた。この踊りは神功皇后の時代から伝わるもので、江戸時代には全国に広まり、東京浅草の「かっぽれ」の起源ともなった。この日は、約20人の少女が教導師の音頭に合わせて客席の間を踊りながら回り、天下泰平、庶民繁栄を祈願した。

子どもたちの軽やかな踊りに続いて、能楽師 小笠原 匡氏による鎮魂延年「黒い媼（おうな）」舞（P1参照）が始まると、会場は一転して厳かな雰囲気に包まれた。腰を屈めた媼（老女）がゆっくりとした仕草で地鎮・鎮魂の舞を披露し、澄んだ鈴の音が会場全体に響き渡った。その後、関西フィルハーモニー管弦楽団がヨハン・シュトラウス作曲の「ラデツキー行進曲」を演奏しながら入場し、張りつめた空気が華麗なムードに一変した。指揮を執るのは同管弦楽団首席指揮者の藤岡幸夫氏。ワーグナー作曲の楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー（第1幕への前奏曲）」が披露され、迫力ある演奏で参加者の「文化立都」にかける思いを高揚させた。この後、「映像で綴る協会30年のあゆみ」が上映された。

続いて当協会の堀井良殷理事長が御礼の挨拶を行った後、オペラ歌手の増田いずみ氏が「われら愛す」を独唱した（伴奏:平山朋子氏）。この歌は、1953年、サンフランシスコ講和条約発効1周年を機に新しい国民歌をつくろうと、壽屋（現サントリーホールディングス）社長の佐治敬三氏（大阪21世紀協会・第3代会長）が全国公募して作られたもの。歌詞5万点、曲3千曲のなかから、サトウハチロー氏や山田耕筰氏らの審査によって選ばれ、現在も一部の学校などで歌い継がれている。この日は、関西・大阪が美しい日本の未来と地球社会に貢献する地域でありたいという思いを込め、式典のフィナーレを飾った。

式典会場となった国立国際美術館は、世界的に珍しい完全地下型の美術館で、地下2階の吹き抜けにはジョアン・ミロや須田悦弘などの作品が常設されている。その長方形の展示スペースを式場として効果的に活用するため、ステージを取り囲むような格好で上手と下手に来場者席を配置。関西フィルハーモニー管弦楽団の演奏などが身近に体感でき、ドラマチックな演出が一層引き立てられた。

式典後に行われた「感謝の集い」では、当協会の熊谷信昭会長が、「文化の薫り高い魅力ある大阪の実現に向けて30年。これからも先人が掲げた高い理想をもって、世界の人たちから敬愛される名誉ある都市となるよう力を尽していきたい」と挨拶。協会賛助会員をはじめ、元協会副会長、歴代理事や評議員、元協会スタッフが一堂に会し懇親を深めた。

また、料理研究家・田中愛子氏のプロデュースで、関西の若手食文化クリエーターたちが、独自のスタイルを発揮した日本料理やフランス料理、スイーツ、フラワーアレンジメントで来場者をもてなした。

「われら愛す」
作詞:芳賀秀次郎　作曲:西崎嘉太郎

われら愛す
胸せまる　あつきおもひに
この国を　われら愛す
しらぬ火　筑紫のうみべ
みすずかる　信濃のやまべ
われら愛す　涙あふれて
この国の空の青さよ
この国の水の青さよ

われら歌ふ
かなしみの　ふかければこそ
この国の　とほき青春
詩ありき　雲白かりき
愛ありき　ひと直かりき
われら歌ふ
をさなごのごと
この国のたかきロマンを
この国のひとのまことを

われら進む
かがやける　明日を信じて
たじろがず　われら進む
空に満つ　平和の祈り
地にひびく　自由の誓ひ
われら進む
かたくうでくみ
日本（ひのもと）の清き未来よ
かぐわしき夜明けの風よ

関西フィルハーモニー管弦楽団

増田いずみ氏

30周年

関西・大阪21世紀協会 設立30周年記念式典

「住吉踊」で天下泰平を祈願（住吉踊保存後援会）

藤岡幸夫氏

感謝の集い

鎮魂延年「黒い媼（おうな）」舞（小笠原匡氏）

熊谷信昭会長

中村翫雀氏（歌舞伎俳優）

「文化は遊びの中から生まれてくるものであると同時に、人を育てることで守られていく。その意味で私たちが21世紀に何を残せるかを考え、活動していきたい」

関西の若手食文化クリエーターたちが腕を奮い、来場者をもてなした（感謝の集い）。

開式前に特別展「夢か、現か、幻か」（映像作品）を鑑賞する参加者

協会設立30周年記念誌
「文化立都ー都市格の向上をめざしてー」

既刊「20年記念誌」の続編としてこの日に発刊した。過去10年の協会活動や各界からのメッセージを掲載。表紙および中面扉には、アートストリーム2012で関西・大阪21世紀協会賞を受賞した日本画家・藤原郁子氏の「文化の女神」が採用されている。B5版・248頁。